

1. 天然アユを増やす河川整備

高橋勇夫（たかはし河川生物調査事務所）

天然アユを見直す動き 全国各地でアユの減少が目立ち始めた。冷水病の蔓延、河川環境の悪化、海域での稚魚の減耗等々、様々なことが原因とされている。

対策として、各地で種苗の放流がさかに行われてきたが、そのことは正しかったのだろうか。高知県では20年前から種苗放流量が増え続けている。ところが、それに反比例するかのように漁獲量は減少の一途をたどっている。同様の例は他の河川からも報告されている。放流に偏った増殖策の限界が見え始めたと言ふべきで、天然アユ資源を見直すべき時に来ている。

天然アユを増やすことに成功した事例 放流に偏った増殖に限界を感じて、天然アユを見直す漁協が増えており、実際にアユを増やした所も出てきた。たとえば愛知県の矢作川、鳥取県の日野川等で、これらの河川に共通しているのは、これまでの「経験重視」の資源管理を改め、科学的な手法を取り入れたことにある。

まず、川やアユの現状を科学的に調査し、川の抱えている問題点、どうしてアユが減っているのか明らかにする。そのうえで現実的な対策を検討し、それを実践してきた。さらに効果についても検証し、対策の改善に結びつけている。

日野川を例にとると、まず2年間の基礎調査で天然アユが減少した原因を探った。その結果、流域から川に流れ込む泥によって、アユが産卵する河床が堅く締まって産卵しづらくなっていることや堰堤に設けられた魚道の機能が悪くアユの自由な分布を妨げていること等が分かってきた。そこで漁協・釣り人・行政が中心になり「産卵場整備」や魚道の改修（工費が安く効果が大きいタイプの導入）を始めた。そのような取り組みを始めてから、日野川ではアユの遡上量はコンスタントに増えている。

うまく結果が出ない事例 もっとも、このような取り組みの全てがうまくいくというわけではない。原因が分かっても対策が取れない要因（例えば気象条件）もあり、そんな川では、なかなか思うような結果は出ない。

高知県の奈半利川はダムのために河床が荒廃し（砂利の減少、河床のアーモコート化）、アユの産卵が困難になっていた。そこで、プラントでフルイに掛けた砂利（5-100mm）を投入し、産卵場を造成した。産卵場を造成後はふ化する仔アユの数が飛躍的かつ安定的に増大した。しかし、翌年の遡上量には目立った変化はなく、むしろ造成前よりも減少する傾向にさえあった。原因は、アユが大量にふ化する時期と生残率が高い時期のミスマッチが起きていたことで、大量にふ化した11月生まれが翌年にほとんど遡上していないことが分かってきた。

このように、自然相手の仕事だけに思うような結果が得られないこともあるが、あきらめずに続けていると、やがてそれなりの結果が出るようである。自然条件が整って、アユ資源が回復しようとする時には回復力が大きくなる傾向があり、資源が落ち込む時には、その落ち込みを小さくできる可能性が高い。対策を持続することが大切と言える。

新たな課題 天然アユを増やすことに成功した川でも新たな問題が持ち上がっている。先述の日野川では天然アユが増えても釣果があまり伸びず（原因として過密、病気の発生を推定している）、釣り人からは天然アユを増やす対策に反対する声も出始めた。種苗（湖産）放流に力を入れるべきという意見も出ている。

このような意見を聞きながら「なぜ天然アユを増やすのか？」今一度、その理念を関係者で共有する必要があることを強く感じている。